

研究 報告

福岡県におけるナシ黒星病 DMI 剤感受性 低下と防除対策

福岡県農林総合試験場 菊原賢次

はじめに

福岡県では常緑、落葉果樹の栽培が盛んで、多くの品目が栽培されている。その中でも、ナシは栽培面積約400 haで、‘幸水’を中心に盆前出荷を目指して栽培されている。‘幸水’は黒星病、赤星病および輪紋病に感受性で、これらの防除のために年間を通じて十数回の薬剤が散布されている。その中でも *Venturia nashicola* Tanaka & Yamamoto によって引き起こされるナシ黒星病は葉や果実に発生し、落葉や裂果等を引き起こす重要病害である。特に、‘幸水’は他の赤ナシ品種と異なり、果実肥大期にも感受性が高いため(梅本, 1993)、本病の防除は重要である。本病は古くから難防除病害として知られていたが、1980年代後半から浸達性と優れた防除効果を持つ DMI 剤が使用されはじめると、県内での発生は減少傾向になった。ところが、2002年ころから、通常の実地管理を実施しているにもかかわらず、本病が多発する事

例が散見されるようになり、基幹防除剤である DMI 剤の効果低下が疑われるようになった(図-1)。

I 2007年における DMI 剤感受性

ナシでは DMI 剤の使用が開始された当初から、海外のリンゴ黒星病菌 (*Venturia inaequalis* (Cooke) Winter) で DMI 剤耐性菌の報告があったため、耐性菌のモニタリングが行われた。分離菌株と薬剤添加培地を用いた感受性検定では、低感受性菌が発見されるものの、生物検定では薬剤の効果は維持されており、薬効の低下を招く耐性菌は長らく発見されなかった。ところが、2005年に福岡県で採取されたナシ黒星病菌で DMI 剤の効力低下を伴う耐性菌が初めて確認された(石井・菊原, 2007)。このため、2007年に県内主要産地の感受性を生物検定で調査した。県内8圃場から採取した菌に対する防除価はフェナリモルで平均値59、ヘキサコナゾールで87、ジフェノコナゾールで100であった(図-2)。一方、

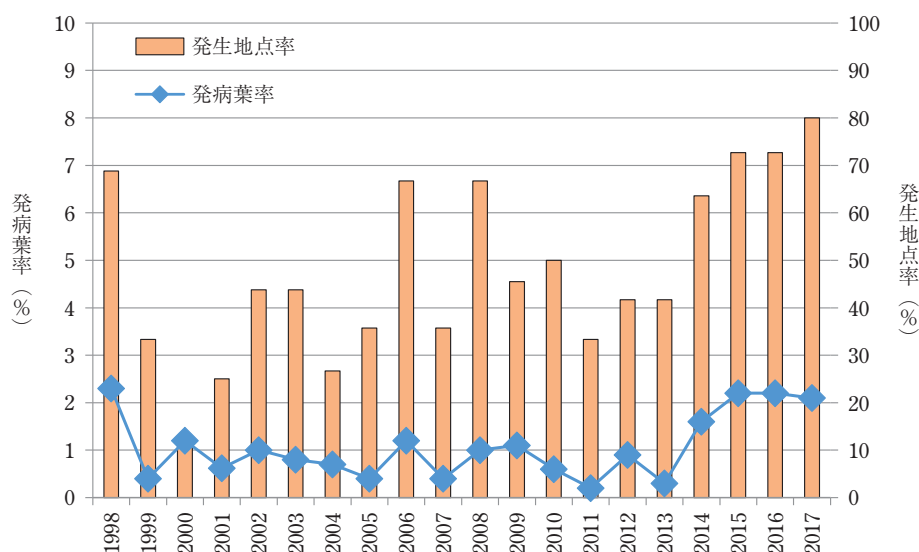


図-1 福岡県におけるナシ黒星病の発生推移
注) 福岡県病害虫防除所調査。

Resistant Development against DMI Fungicides on Pear Scab and
Its Management in Fukuoka Prefecture. By Kenji KIKUHARA
(キーワード: ナシ黒星病, 耐性, DMI 殺菌剤)